

日本グループ・ダイナミクス学会会報

ぐるだい

JGDA
ニュース

The Japanese Group Dynamics Association

<http://www.groupdynamics.gr.jp/>

第 45 号

(2014 年 7 月 21 日)

発行所：〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1

東京大学人文社会系研究科 社会心理学研究室

日本グループ・ダイナミクス学会

E-mail : sec-general@groupdynamics.gr.jp

発行人：唐沢かおり 編集担当：北村英哉

【目次】

§日本グループ・ダイナミクス学会第 61 回大会へのお誘い……………	2
★大会準備委員長から：安藤清志	
§山岸俊男先生の講演会に参加して……………	3
杉浦淳吉	
§第 15 回 SPSP 大会参加記……………	4
藤井 勉	
§初めて論文を書いたとき……………	5
古谷嘉一郎	
§常任理事会からのお知らせとお願い……………	7
★役員選挙について	
§事務局からのお知らせとお願い……………	7
★会員データ調査協力をお願い	
★研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について	
★実験社会心理学研究 掲載予定論文	
★実験社会心理学研究の特集テーマ募集	
§グルダイ学会関係連絡先……………	9

★日本グループ・ダイナミックス学会第 61 回大会へのお誘い★

大会準備委員長 安藤清志（東洋大学）

本年度の大会があと 2 カ月に近づいてきました。発表登録が開始されて以来、何件くらいの申し込みがあるのか心配していましたが、締め切り日までに 96 件の一般研究発表と 4 件のワークショップの申し込みをいただきました。他学会の大会が前後にある中で、本大会でのご発表を選んでいただいた会員の皆様に、まずはお礼を申し上げます。

準備委員会としても大会をさらに盛り上げるべく、東洋大学ヒューマン・インタラクション・リサーチセンター(HIRC21)との共同企画として、3 名の先生による講演と、特別ワークショップを用意いたしました。講演者のうち、成均館大学の崔訓碩先生は、韓国を代表する社会心理学者の一人です。今回は、文化心理学で取り上げられてきた集団主義・個人主義と従来の小集団研究を融合させる形で、「集団主義的個人主義」への志向性が集団の創造性にどのような影響を及ぼすかが扱われます。カナダから来日される南昌廣先生は、ルワンダにおける集団虐殺後の和解プロセスについての実践研究を自ら現地でおこなっている若手研究者です。森田療法を基礎にした実践ですが、社会心理学に造詣が深い先生ですので、大いに議論が盛り上がるのではないかと思います。ドイツのケルン大学からはホフマン先生が来日、最近使用されることが多くなった経験サンプリング法が社会心理学の発展にどのように寄与するかを語っていただきます。偶然なのですが、これら 3 つの講演を眺めてみると、先生方の拠点とする地域（アジア、ヨーロッパ、北米）、研究方法（実験室実験、実践研究、方法論）、研究内容（集団内行動、集団間行動）と、全体としてバランスがとれたプログラムになりました。

「日韓若手研究者インタラクションプログラム」と名付けられた特別ワークショップ（2 日目午後）は、文字通り日韓の大学院生が 2 名ずつ、それぞれ自らの研究を紹介する中で互いに研究交流を深めようとするものです。日本も韓国も欧米の研究に強い関心をもっていますが、互いにじっくりと向き合うと、「東アジア」としての類似性だけでなく日韓の文化の違いにも目が向いて、研究がさらに深まることが期待されます。

さまざまなプログラムにおける知的交流をさらに深めるのは、大会の花？懇親会です。現在、和やかな雰囲気夜景と料理を楽しんでいただけるように準備を進めています。飲み物に関しては、事務局幹事尾崎先生のアイデアにより準備委員有志が「お薦めの一本」を持ち寄ることになりました。こちらも、研究プログラムと同様に「多様性」を楽しんでいただけることと思います。是非、ご参加ください。準備委員一同、大会で皆様方にお会いするのを楽しみにしております。

平成 25 年度文化功労者の顕彰を受けられた山岸俊男先生が、一橋大学の国際企業戦略研究科に特任教授として着任され、記念のシンポジウムが一橋講堂にて開催されました。顕彰をお祝い申し上げますと共に、参加された慶應義塾大学の杉浦淳吉先生に報告記をいただきました。

★山岸俊男先生の講演会に参加して★

杉浦淳吉（慶應義塾大学）

今回の山岸先生の講演会に伺ったきっかけは、その案内文に触発されたからです。曰く、「社会心理学は、日本では戦後に一橋大学を拠点として、南博先生がその発展の礎を築かれた学問です。南先生は社会心理学を社会科学の統合の基礎となる学問とすることをめざしていましたが、現在の社会心理学は実際には、個人の頭の中にある社会の理解に特化した心理学の一分野となってしまいました。」この引用部分は、私の興味における二つのことを象徴的に表しています。

まず前半部分を拝見した際に、日本における社会心理学の歴史に対する自分自身の認識の甘さを悔いつつ国立にある一橋大学をイメージしました。ところが、今回の会場である「一橋講堂」の所在地が千代田区の一ツ橋であることを直前に気づき、危うく国立まで出かけるところでした。今回の講演会は学際的で実践的な取り組みがなされている一橋大学大学院国際企業戦略研究科に山岸先生をお迎えしての記念行事(シンポジウム)ということで、歴史的経緯もあわせて知ることができました。

次に引用後半部については、どちらかといえば社会心理学の現状に批判的であるようにも読めますが、なるほど言い得ていると私はむしろ感銘を受けました。山岸先生のご著書『社会的ジレンマの仕組み』のあとがきにも同じような趣旨で社会心理学の当時の現状に対する懸念が述べられています。しかし、常に社会との関連から社会心理学を考えてきた者からすると、一方で社会認知研究や近年の脳科学と密接な関係をもつ研究に一方で憧れてしまう部分もある訳です。個人が社会について頭の中でどのように理解しているのかということを極めていればこそ、他の社会科学の分野に対抗して学際的な研究分野で渡り歩いていける訳です。社会科学という大きな枠組みの中で社会心理学のアドバンテージは何かということについて気づかされますし、大きな流れの中での位置づけを再考する機会にもなり得ます。

実をいうと、山岸先生のご研究から学ぶべきところが私にとっては大きく二つあります。一つは環境問題への対処の研究をしている関係で、社会的ジレンマに関する実験研究はフィールド調査を行う際のよりどころとなっていることです。もう一つは社会心理学における実験の意味ということです。『信頼の構造』にもこの「実験の意味」が詳しく述べられていて、実験というのは理論を検証するためにあるのであって、大事なことはその理論を使って社会について理解するということに感銘を受け、この部分は何度も繰り返し読んで、

私自身が行っているゲーミング研究の意義を考えるヒントとしてきました。

以上のような思いをもとに、講演を拝聴して感じたことを述べて締めたいと思います。今回のご講演でもそうですが、信頼の解き放ち理論をご説明される際に「常識と異なった結果」というフレーズがよく出てきます。たしかにそうなのですが、山岸先生の一連のご著書や論文を拝見してきた者としては、それが既に「あたりまえ」になってきています。つまり、社会心理学者にとって「信頼のアメリカ、安心の日本」は常識です。では、今回のテーマである「心の文化特定性」に関する山岸先生の実験結果に基づいて世の中の人々が新たな「常識」を身につけたとき、私たちの社会やその文化はどのように変わっていくのだろうと私には感じられました。ご講演の後には山岸先生と一條和生先生との対談があり、その後質問の時間になったのですが、会場全体が山岸先生のご講演内容に圧倒されたのか、あまり積極的な質問がなかったのですが、おかげで上述の感想について質問をすることができました。社会心理学の進むべき道筋を切り拓いてきていただいたことに感謝しながら、今後の研究を進めていきたいと気持ちを新たにできた、そんなシンポジウムでした。

★第 15 回 SPSP 大会参加記★

藤井 勉 (College of Humanities, Sungshin Women's University)

2014年2月13日から15日にかけてアメリカのテキサス州オースティンで開催された The 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology (SPSP) に参加し、発表を行いました。同じ研究室で仕事をしている先生がオースティン出身で、「のどかでいい街だ」という話を聞いており、期待に胸を膨らませての訪米でした。



☆テキサス州議会議事堂☆

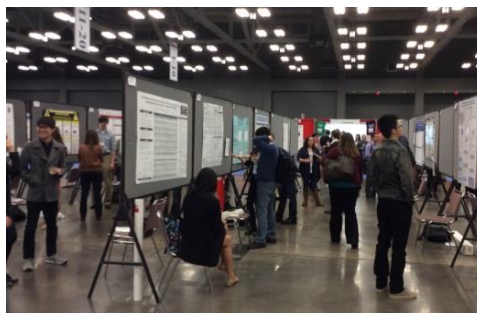
2012年のICP(南アフリカ)以来の長いフライトで疲弊しましたが、オースティンはその疲れと時差ボケを忘れさせてくれるほど、落ち着いていて空気も清々しい素敵な街でした。会場となった Austin Convention Center はライブハウスやバーが多い六番街の近くにあり、多くの参加者が学会後に足を運んでいたようです。100年以上の歴史のあるテキサス州議会議事堂も近く、朝の気持ちいい気候の中を散歩しながら見学し、敷地内に生息するリスに癒されてきました。

私は Implicit Association Test (IAT) を用いた潜在的なパーソナリティの研究を続けており、今回の発表も、困難な課題に直面した際に、潜在的自尊心の果たす「動機づけの低下を抑える」というバッファリング効果を検討したものでした。発表をされていて驚いたのは、発表を聞いてくださる方はどなたも IAT をご存じで、IAT の説明は不要だったことで

す。国内学会では「IAT って何ですか？」という質問をいただくことが多いので、国内での IAT 研究はまだまだ少なく、知見を重ねていく必要があることを実感しました。

会場での昼食にはボックスランチがつき、共同研究者の澤海さんと一緒に食べていたところ、親密な他者との関係性について研究されている Charles Hill 先生と席が一緒になりました。お話しの中で、私が韓国の大学に勤務していることを知った先生から国際比較プロジェクトへのお誘いをいただき、ありがたくお引き受けしました。

IAT を使い始めて 7 年になり、論文を書くたびに引用していた Greenwald 先生に初めてお目にかかる貴重な機会にも恵まれました。ICAP や ICP のような国際学会は、規模が大きすぎるあまり、こういった機会が少なかったのですが、SPSP は「ほどよい」大きさです。普段は論文でしかお名前を拝見したことがない先生とも実際にお話しできるという点で、とても刺激的な学会といえます。母語を使って密な議論ができる国内学会は貴重ですが、「世界」の心理学を感じられる国際学会も非常に魅力的です。まだ国際学会に参加されたことがない方は、SPSP はデビューに適した学会のひとつだと思いますので、参加を検討されてはいかがでしょうか。



☆ポスター会場の風景☆

今号、新企画で興味深いシンポジウムやワークショップ、研究会への参加報告、さらにすでにご活躍の先生が、「初めて論文を書いたとき」と題して、最初の刊行時のあれやこれやを記していただくことで、若い研究者たちの刺激になればという記事企画も用意いたしました。これからも「こういった記事が読みたい」というご要望がありましたら、広報事務局までご意見をお寄せください。

広報担当

★初めて論文を書いたとき★

古谷嘉一郎（北海学園大学）

私が初めて学会誌論文を執筆したのは修士課程 1 年生の時でした。しかしながら、採択にいたるまでに 3 年程度かかりました。ここでは、投稿から採択にいたるまでを時系列にそって書いてみようと思います。

学会発表でそれなりの手ごたえがあったため、その発表内容を学会誌に投稿することに決めたことを記憶しています。そして、どの雑誌を選ぶかについて指導教員の先生と相談し、日本社会心理学会の社会心理学研究に投稿することにしました。とはいえ、まだ何もよくわかっていない大学院生でしたから、「とりあえず書いてみよう」という感じでした。

指導教員の先生と打ち合わせを行い、たたき台の原稿を数週間かけて執筆しました。そ

して、その原稿を指導教員の先生に「おねがいしまーす」とお渡しし、見ていただいたのです。その後、しばらくの間、1週間に2回程度のペースで打ち合わせをすることになりました。論理展開に穴がある部分や、論拠不足の部分をピックアップしていただき、修正案を考えて直す。これを何度も繰り返しました。修正している間は、「これ無理かも」と何回も思いました。とはいえ、着実に修正を積み重ねることで、約2ヶ月で初稿が出来上がりました。当時はオンラインでの投稿ではなく、封筒での投稿でした。大学そばの郵便局に行き、祈りをこめるように局員さんに渡しました。半年ほどたって査読結果が返ってきました。判定はいわゆるC（大幅な修正の後、再審査）でした。

査読のコメントを読んだ際、自分たちが苦勞して作った作品を否定される気分になり、つらかったことを記憶しています。しかし、先生がたや先輩がたに「修正すれば採択される可能性が上がるのだからやろう」と励ましてもらいつつ、ゆううつな気分で修正をしました。ゆううつな気分のおかげで精緻に原稿を見ることができたので、それはそれでよかったのかもしれません。そして、修正原稿、修正コメントへの返信、修正対照表を作成し、また編集事務局宛に郵送しました。半年程度で、査読結果が返ってきました。C判定でした。「初稿よりは良くなっているが、まだまだ・・・」というコメントを見て、ゆううつな気分でありながら、小さなよろこびを感じた記憶があります。少しは良くなったことが自分にとっては大きな報酬だったのです。査読者の先生がたに自分の考えを受け入れてもらったことが嬉しかったのかもしれません。そして、原稿の修正や査読コメントに返信し、編集事務局宛に郵送しました。すると、次もC判定。さすがに取り下げようかとも思いました。ですが、ここであきらめたら負けだと思い、修正をしました。その結果、B判定にこぎつけました。そして、すぐに修正し、提出して念願の採択にこぎつけました。

正直いって長かったです。では、なぜここまでかかったのでしょうか。ここでは3つほどあげてみます。第1に、論理展開の欠落です。自分では論理が通っていると思っても、それが飛んでいる箇所がありました。それを査読時に指摘され、何回も修正した記憶があります。第2に、代替説明への考慮が不足していたことです。執筆の際、代替説明の可能性を考えずに議論を進めてしまい、査読時に指摘されて焦ることが何度かありました。第3に表記ミスの問題です。これは書くまでもないでしょう。これらへの対策としては、一度書いた原稿を数日寝かせた後に見直す、または周りの人に見てもらって、忌憚ない意見をもらうことがよいと思います。もちろん、「数日前の僕は何を書いていたんだ」と思ってへこむこともあるでしょうし、周りの人のコメントで「ぐぬぬ」と思うかもしれません。まあ、状態自尊心の低下は一時的なものです。いつか来る採択を見据えて、修正しましょう（と、今も自分に言い聞かせています）。

★常任理事会からのお知らせとお願い★

【役員選挙について】

担当 戸梶亜紀彦（東洋大学）

本年度は、次期（2015 年度-2016 年度）の役員選挙を実施する年に当たります。以下の日程で実施する予定です。会員の皆様には、選挙台帳作成へのご協力と共に、積極的な投票をお願い申し上げます。

- 9 月下旬：選挙台帳（案）を送付
- 10 月下旬：選挙台帳（案）異議申し立て締め切り／選挙台帳確定
- 11 月中旬：役員選挙（会長、理事、監事）の投票用紙、選挙人名簿などの送付
- 12 月上旬：投票締め切り
- 12 月中旬：役員選挙（会長、理事、監事）開票
- 1 月上旬：理事の互選による常任理事選挙
- 2 月上旬：選挙結果の確定と公表

★事務局からのお知らせとお願い★

【会員データ調査協力をお願い】

2014 年度は会員名簿の更新年度となっております。会員データ調査票をお送りしますのでご回答のほどお願い申し上げます。詳細は送付いたします書面をご覧ください。締め切りが 7 月末と差し迫っておりますが、ご容赦下さい。ご返送いただけなかった場合は、事務局に登録されている内容のまま掲載させていただきます。ご了承ください。

お送りいただきました「会員データ調査票」に記載の個人情報については、日本グループ・ダイナミックス学会が責任を持って管理し、学会の運営並びに会員への名簿配布、当会開催事業のお知らせに必要な範囲内で利用させていただきます。

【研究の国際化支援制度（英文論文校閲補助）について】

この制度は、本学会会員の研究の国際化を支援するため、会員が自らの研究成果を英文誌に投稿する際に英文校閲代金の一部を補助するものです。年齢制限などありませんので、奮ってご応募ください。

詳細は学会ホームページ

(http://www.groupdynamics.gr.jp/support_international.html)をご参照下さい。

【実験社会心理学研究 掲載予定論文(2014 年 7 月 16 日現在)】

■ **2014 年度 54 巻 1 号 (2014 年 8 月中 発送予定)**

原著論文

平島太郎・土屋耕治・元吉忠寛・吉田俊和 (受付番号 1215, 受稿 2012/10/16, 受理 2013/8/14)

態度の両価性が行動意図の形成に及ぼす影響—子宮頸がん検診の受診を対象とした検討—

日高友郎・水月昭道・サトウタツヤ (受付番号 1208, 受稿 2012/7/2, 受理 2013/8/27)

サイエンスカフェにおけるファシリテーターの集団維持機能：市民—科学者間の会話を支える要因に注目して

高森順子・諏訪晃一 (受付番号 1202, 受稿 2012/1/31, 受理 2013/11/13)

災害体験の手記集の成立過程に関する一考察—「阪神大震災を記録しつつける会」の事例から—

野波 寛・土屋博樹・桜井国俊 (受付番号 1211, 受稿 2012/9/25, 受理 2013/11/16)

NIMBY としての在日米軍基地をめぐる多様なアクターの正当性：公共政策の決定権に対する当事者・非当事者による承認過程

展望論文

飛田 操 (受付番号 1217, 受稿 2012/11/27, 受理 2013/7/21)

成員の間の等質性・異質性と集団による問題解決パフォーマンス

■ **2014 年度 54 巻 2 号 (2015 年 2 月中 発送予定)**

資料論文

杉浦 仁美・坂田 桐子・清水 裕士 (受付番号 1218, 受稿：2012/12/7, 受理：2013/12/9)

集団間と集団内の地位が内・外集団の評価に及ぼす影響—集団間関係の調整効果に着目して—

以上の論文はすべて早期公開を行っています。

https://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjesp/advpub/0/_contents/-char/ja/

【実験社会心理学研究の特集テーマ募集】

実験社会心理学研究では、グループ・ダイナミックスや社会心理学に関連する特集を掲載します。特集は、読みごたえのある論文 3 編程度で構成します。特集についての企画をお持ちの会員は、企画の趣旨、特集論文の概要等をまとめた企画書 (A4 版 1-2 枚程度) を、編集委員長に提出して下さい。企画の採択については、常任編集委員会で審議、決定します。特集論文の審査手順など詳細は、学会ホームページ (<http://www.groupdynamics.gr.jp/feature.html>) をご参照ください。

なお、実験社会心理学研究は、特集の掲載によって、一般投稿論文の掲載に大幅な遅滞が生じないことを重視しています。企画を提出される方は、この点をお含みおき下さい。

★グルダイ学会関係連絡先★

本学会では、事務支局を中西印刷株式会社に開設しております。入退会、住所・所属等変更、会費納入、機関誌等の未着・メールマガジンなどのメール配信先の登録・変更・停止等の連絡先は、事務支局である中西印刷株式会社までご連絡ください。

また、論文投稿先・審査書類送付先も中西印刷株式会社となっております。詳細は下記をご覧ください。各種お問い合わせの具体的な連絡先は以下の通りです。

◆事務支局【入退会、住所・所属等変更、その他お問い合わせ先】

日本グループ・ダイナミックス学会事務支局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入

中西印刷（株）学会フォーラム内

電話：075-415-3661

FAX：075-415-3662

E-mail：jgda@nacos.com

◆学会運営・対外業務関連

日本グループ・ダイナミックス学会本部事務局

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂 1-7-57

昭和女子大学 人間社会学部心理学科 藤島喜嗣研究室

電話：03-3411-2945

E-mail：sec-general@groupdynamics.gr.jp

◆投稿論文・学会誌編集関連

日本グループ・ダイナミックス学会 編集事務局

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入る中西印刷（株）営業部編集校正課内

電話：075-441-3155

FAX：075-417-2050

E-mail：jjesp-hen@groupdynamics.gr.jp

編集委員長

〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1 首都大学東京人文科学研究科 沼崎誠

E-mail：numazaki@tmu.ac.jp

◆広報関連

【ぐるだいニュースの編集・記事の投稿，メールマガジンへのニュース記事投稿，新刊案

内や研究会案内等のニュース記事，公募情報など】

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

関西大学社会学部心理学専攻 北村英哉研究室

E-mail : office@groupdynamics.gr.jp までお送りください。

また，マガジンに関するご希望・お問い合わせ等も，同アドレスまでお送りください。

【編集後記】

今回のぐるだいニュースはいかがでしたでしょうか？今回は新しい試みとして、現在ご活躍されている先生方に「初めて査読論文を書いた時」についてお伺いする記事を掲載しました！誰しも「初めての査読論文」については、さまざまな思い出深いエピソードがあるのではないかと思います。先生方のなかには、ご自身の「初めての査読論文」について思いを馳せた方もいらっしゃるのではないのでしょうか？また、これから論文を執筆していく大学院生の方々にとって、先生方が「どのように論文執筆の困難を乗り越えてきたのか」について知ることですれども論文執筆の励みになればと思います。（編集子）